法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-29

幕末ロシア留学生市川文吉に関する一史料

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Society and labour / 社会労働研究
(巻 / Volume)
39
(号 / Number)
4
(開始ページ / Start Page)
129
(終了ページ / End Page)
188
(発行年 / Year)
1993-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00006813

幕末ロシア留学生市川文吉に関する一史料

宮永　孝

筆者は、徳川幕府が派遣したロシア留学生市川文吉の人と事績について、先に本誌の第三七巻第四号（平成三年三月発行）に「幕府ロシア留学生　市川文吉のこと」題して小論を発表した。が、目下本邦におけるドイツ学の沿革について調査研究中のところ、市川文吉の父兼恭（かねのり）（通称斎宮（いつき）、のち開成所教授職、学士院会員）が書き残した日記（「浮天斎日記」）を閲読する機会に恵まれた。この自筆日記（墨書）は、縦二十三cm、横十五・五cmの大きさで、厚さは各巻により異なるが四、五cm位、五巻（巻之一～巻之五）から成っている。現在東京大学史料編纂所に貴重書として架蔵されているが、どのような径路から同所の所蔵に帰したものか興味を覚える。巻之一の扉のうらに楕円形の印があり、その中に「維新史料編纂会図書　大正十三年一月八日購入　二四五一六」といった文字が見られる。このことから、同日記は、当時、古書市か書肆に売りに出されたとき、維新史料編纂会の方で購求したものであろう。

筆者は先に『幕末おろしや留学生』（筑摩書房、平成二年一月刊）を上梓したとき、残念ながら兼恭の「浮天斎日記」を利用することを逸した。が、今回この日記を一読してみて、文吉に関する記述が少なからずあることに気づくと同時に、従来不明であった点に関して多くの貴重な情報を提供していることを知った。維新前の海外留学生に関す

る調査研究はこれまでに諸先学により多くなされて来たが、未だ十分とはいえないのである。ことに徳川幕府派遣のロシア留学生市川文吉については、史料不足からあまり進んでいないのが現状である。戦前においては、昭和十八年秋に医学博士内藤遂が上梓した『遣露伝習生始末』（東洋堂）において市川について言及され、さらにまとまった論考では、維新史料編纂官原平三（故人）が執筆した「我が国最初の露国留学生に就いて」（『歴史学研究』一〇ノ六、昭和十五年六月）「露国留学生派遣の顚末」（『幕末洋学者欧文集解説・山岸光宣（みつのぶ）編』所収、昭和十五年十二月）「市川文吉送別文執筆者略伝」（『幕末洋学者欧文集解説・山岸光宣編』所収、昭和十五年十二月）などがあり、これらを除くと、あまり見るべき研究は見当たらない。[1] ましてやロシア留学生に関する新史料が海外で発見されたというニュースも聞かない。

とりわけ市川文吉に関する個人研究では、先に掲げた原平三の「露国留学生派遣の顚末」（『幕末洋学者欧文集』に収録する際に編者山岸光宣が訂正増補した）が最もすぐれており、今さら何もつけ加えることが無いほどである。筆者は同論文を再読してみて、部分的に「浮天斎日記」に依拠して書かれていることを改めて知った。が、その後の研究で、文吉の渡露前と帰国後の動向について多少ともつけ加えて置いた方がよいと思える箇所が相当生じたので、敢てペンを取った次第である。

市川文吉は弘化四年（一八四七）六月二十三日、のちの開成所教授職市川兼恭（斎宮）の長男として江戸神田新白銀町に生まれた。幼名を秀太郎といい、文久元年十一月二十五日に文吉と名を改めた。幼少年時代の文吉については詳らかにしないが、十歳のとき小学を学び、[2] また父とともに調練等を見学したという。安政七年（万延元年）（一八六〇）四月四日、蕃書調所においてフランス語学習の命を受けたが、同所にはこれを教える者がいなかったので、三田の正泉寺（増上寺末寺、三田台町）に通って仏語を学んだとある。[3] しかし、誰について学んだものか明らかでない。

文久二年（一八六二）三月二十八日、文吉は父に伴われ福井藩邸に赴き、父兼恭の主君で藩侯に拝謁した。元治元年（一八六四）十一月二十四日、文吉は開成所の仏学科の教授手伝並に任ぜられた。翌慶応元年（一八六五）初頭、幕府は箱館駐割初代ロシア領事ゴシケヴィッチの勧めもあり、ロシアに留学生を派遣することに決した。留学生の選抜は、開成所で独・蘭・仏・英を学んでいる旗本や御家人および箱館奉行支配向の者の中から志願者を募ることにし、文吉のほか、緒方城次郎（二十二歳）・大築彦五郎（十六歳）・田中次郎（十五歳）小沢清次郎（十三歳）・山口作左衛門（三十歳）ら五名が選ばれた。文吉の出願を思い立った父兼恭は、早くからロシアに対して興味を抱き、またロシア使節プチャーチン伯が安政五年（一八五八）日露通商条約締結のために来日した折、接伴委員であったことなどから息子をロシアに遣りたい気に駆られたようだ。何よりも相談にあずかった蕃書調所の元頭取古賀謹一郎（一八一六～八四、維新後新政府に仕えず）や同僚加藤弘蔵（弘之）らの意見も文吉の出願にあずかって力があったと考えられている。[4] 後年、東京外国語学校で文吉からロシア語を学んだ鈴木要三郎（明治十七年七月卒、のち海軍主計大佐）が、文吉から聞いた直話によると、父を通じて文吉にロシア語の学習を勧めたのは古賀謹一郎であったという。

ともあれ慶応元年三月十八日に文吉のロシア留学の願書が出され、同月二十一日に誓詞を差し出している。幕府に願いの筋が聞き届けられ、留学許可の命が下ったのは四月九日のことである。同日、父兼恭は開成所頭取林大学頭煒の所へお礼のための挨拶に伺い、同夜隣家の加藤弘蔵を招き内祝のようなことをやっている。また文吉と同じくロシア行が決まった緒方城次郎（二十二歳）もこの日、市川家を訪れている。四月十一日、こんどは文吉が緒方宅を訪問し、翌十二日江戸在府の箱館奉行並新藤鉛蔵邸を訪ねている。これは新藤がロシア留学一件の取扱者であったことから、挨拶に伺ったものか。十四日付の兼恭の日記に「魯行人会合」とあるが、山内を除く在府のロシア留学生五名が一同に会したということであろう。同日、林（大学頭？）とロシア留学生大築彦五郎（十六歳）が市川宅を訪問して

いる。十五日、兼恭は文吉の支度金（三百両を三回に分けて支給された、第一回目）百両を城中において受け取り、同日下谷の松本屋で催された文吉の壮行会に出席した。この送別会には開成所の教授方三十一名が出席し、美妓百名を呼んでどんちゃん騒ぎを演じたものらしい。二十六日、文吉は乗船地の箱館まで同行してくれる従者富次郎と初めて会った。翌二十七日、兼恭は家族全員を連れて柳河春三（しゅんさん）（一八三二～七〇、開成所教授）宅を訪れ、家族全員と記念撮影をした。が、このとき撮った写真は現存しない。また同日、緒方と田中ら両留学生は、市川宅を訪問している。文吉はこの日、再び新藤邸を訪ねた模様。二十八日、「壮士之心得違ひ」によりロシア留学の選にもれた志賀浦太郎（ロシア領事館通訳見習い）が、市川宅に来ている。五月朔日、文吉は「此度魯西亜国に伝習として被差遣もの他御名（徳川家茂）」といったような証書を与えられた。が、これは箱館到着後手にしたもののようだ。

閏五年十九日、支度金（第二回目）の交付があり、文吉は再び百両受け取った。同日、緒方と田中が市川宅を再び訪問している。二十四日、兼恭はロシア留学の途につく緒方・大築・田中・小沢らを自宅に招き宴を催した。この日、支度金（第三回目）百両の交付を受けた。二十八日、文吉は弟森三郎（幕府のイギリス留学生、のち東京大学理学部教授）と共に浅草に遊び、江戸における最後の一日をたのしんだ。二十九日、文吉ほか四名の留学生は江戸を立ち、陸路箱館を目ざした。もう一人の留学生山内作左衛門（箱館奉行支配調役並）は、乗船地箱館で一行に合流する手はずになっていた。江戸出立の当日、文吉らを千住まで送ったものは、弟森三郎と開成所の同僚林正十郎・多門季三郎・安達梅栄（足）・築地与四郎らであった。

一行五名が箱館に着いたのは六月二十六日である。慶応元年七月二十七日（一八六五・九・一六）ロシア留学生六名は、露艦ボガテール号（Bogatyr）に乗り込み、翌二十八日箱館を出帆した。なお、同日僚艦ヴァリアク号（Variag）も同時に出港している。慶応元年（一八六五）における、これら露艦二隻の箱館入港と出港については、箱

館駐箚イギリス領事J・ハワード・ヴァイスの報告に次のようにある。

(No. I.)—Register of Foreign Vessels Entering the Port of Hakodate, during the year ending December 31, 1865.

Name.	Rig.	Flag.	Tons.	Whence coming	Whither going	Arrival.	Departure.
Bogatyr	Corvette.	H.I.R.M.	1,700	Yokohama	Russian ports	April 8	May 22
Variak	Ditto...	Ditto...	2,000	Ditto...	Ditto...	May 13	Ditto...
Variak	Corvette.	H.I.R.M.	2,000	Castris Bay	Nagasaki	Aug. 31	Sep. 17
Bogatyr	Ditto...	Ditto...	1,800	Ditto...	Ditto...	Sep. 7	Ditto...

(Signed) F. Howard Vyse, Consul.

(Commercial Reports from Her Majesty's Consuls in China, Japan, and Siam. 1865. London: Printed by Harrison and Sons. 1866)

同報告から、コルベット艦「ボガテール」号（一七〇〇トン）と同型艦「ヴァリアク」号（二〇〇〇トン）は、この年に二度箱館に出入りしていることが分かる。前者は、一八六五年四月八日（陰暦慶応元3・13）に横浜より箱館に入港し、同年五月二十二日（陰暦4・28）に同港を出帆している。行先は「ロシア諸港」とある。後者は五月十三日（陰暦4・19）に入港し、五月二十二日（陰暦4・28）共に箱館を出帆している。

両艦の第二回目の箱館訪問は、ヴァリアク号が八月三十一日（陰暦7・11）、ボガテール号は一週間後の九月七日（陰暦7・18）である。ヴァリアク号はCastris Bayから来たとあるが、Port Castries（イギリス領西インド諸島の首都、港町）のことか。両艦は九月十七日（陰暦7・28）に箱館を同日に出帆しているが、行先は「長崎」となって

いる。なお、僚艦ヴァリアク号は香港までボガテール号に同行し、しばらく当港に停泊したのち、長崎に寄港し、再び箱館に戻った。[5]

ロシア留学生らの露艦搭乗については、山内作左衛門が父豊城に宛てた書簡（長崎発、慶応元年八月十日付）に「七月廿六日未明魯軍艦へ乗組廿八日朝方蒸気支度仕、同日（二十八日―引用者）過函館出船」（傍点引用者）とあり、また「浮天斎日記」の七月二十七日付の上欄外記に「文吉魯舩乗込　同出帆長崎行」といった条がある所から、一行六名は二十七日までにボガテール号に乗り込んだものであろう。ヴァイス英領事の船舶の出入港情報とロシア留学生の出帆の日時に関する記事とをつき比べると、ぴったり符号する。

次に兼恭が日記の欄外に記した記述をもとに、一行の、箱館出帆からペテルスブルク到着までの行程を記そう。

慶応元年七月二十七日（一八六五・九・一六）　ボガテール号乗船。
二十八日（九・一七）　箱館出帆。
八月五日（九・二四）　長崎到着。
二十三日（一〇・一二）　同港出帆。
二十八日（一〇・一七）　香港到着。[6]
九月五日（一〇・二四）　同港出帆。
十一月二十四日（一八六六・一・一〇）　喜望峰着。
十二月五日（一・二一）　セント・ヘレナ島到着。
八日（一・二四）　同島出帆。
慶応二年正月二十七日（一八六六・三・一三）　イギリスのプリマス入港。

二月九日（三・二五）　同港出帆、同日の夕刻フランスのシェルブール港に到着。
十一日（三・二七）　シェルブールより汽車にてパリに向かう。
十二日（三・二八）　朝、パリに到着。
十三日（三・二九）　朝、パリを出発。
十四日（三・三〇）　朝、ベルリンに到着し、暫時休憩ののち出発。
十五日（三・三一）　朝、ロシア領に入る。
十六日　（四・一）　午後、露都ペテルスブルクに到着。ゴシケヴィッチ宅に泊る。

イギリスのプリマス到着後、対岸のシェルブール港に至った一行は、陸路鉄道にてパリに向かった。やがてパリのサン＝ラザール駅に着いた幕生六名は、それより直ちに旅宿に向かい、旅装を解くのだが、従来、どこのホテルに投宿したものか不明であった。おそらく一行が一泊したのは、「グラントテル・デュ・ルーブル」（Grand Hôtel du Louvre）であろう。「浮天斎日記」慶応三年四月の上欄外記に「田中パリス着　ルーブル宿」と記されているからである。

ペテルスブルグに着いた幕生六名はゴシケヴィッチ宅で四泊したのち、二月二十日（四・五）に借家に移ったが、この日、ロシア密航者橘耕斎が一行を訪ねている。その後留学生らはロシアの学術を学習するに先立って語学をまず学ぶことになり、それをゴシケヴィッチ、その他の出張教師から習った外、橘耕斎・東洋学者ワシリエフ教授などの教導を得たようだ。だが、いちばん困難を覚えたのは、言うまでもなくロシア語そのものの修得であった。慶応二年の暮までにはめいめい専攻科目も決まったが、首都の専門学校や大学に入学するには依然として語学力が不足してい

たものと考えられる。ペテルブルクでの借家暮らしにも慣れてくるにつれて、幕生六名は同じ屋根の下にいては日本語ばかり話し、語学の習得に不利との理由から、分宿を望むようになった。ゴシケヴィッチは初めこの件に反対であったが、交渉の結果慶応三年の春からめいめい別居することになった。六名はいかなる街の誰の家に下宿し、どのような方法で、何を学習したものか未だに不明である。

しかし、田中次郎の下宿先を明かしていると考えられるものに「田中移居ス　リイ町第三□」といった記述がある（「浮天斎日記」慶応三年四月の上欄外記）。ロシア学についての学習の成果が十分上がらぬうちに慶応三年、早くも山内作左衛門は健康上の理由から一行から脱落し帰国の途につき、翌四年こんどは幕府崩壊に伴なう帰国命令に接した緒方・大築・田中・小沢らが帰朝することになった。かくして市川文吉を除くロシア留学生四名は、慶応四年五月二十七日（一八六八・七・一六）ペテルブルクを立ちパリに向かった。パリ到着後、一行はロシア公使館にひとまず身を落ちつけた後、六月一日（七・二〇）徳川昭武の借家（ペルゴレーズ五三番地に現存）にやっかいになった。四人がパリに滞在すること約一カ月、その間に市内見物等を行ない、七月一日（八・一八）パリを発ちマルセイユに向かい、そこから便船を得て帰国の途につき、慶応四年八月二十七日（一八六八・一〇・一二）横浜に安着した。その後、同地にしばらく滞在したのち江戸に向うのだが、帰府は九月一日（一〇・一六）のことであった。

同月七日、留学生大築彦五郎の兄保太郎（歩兵差図役勤方、のちの陸軍中将大築尚志）が市川宅を訪れ、四人の帰国を兼恭に報告し、文吉は帰国の道を選ばず、そのままペテルブルクに在留する旨伝えた。ひとり文吉だけがなぜ単独在留したのか。今となってはその理由を知る術は無いが、おそらくのちに結婚するロシア女性ワシリー・シュヴィロフ（生没年月日不詳）との恋愛のためであったのかも知れない。ペテルブルクに残留した文吉が身を寄せた所は、プチャーチン伯爵邸であったことは周知のことであったが、その住所までは分からなかった。けれど「浮天斎日記」

（明治五年八月の上欄外記）に文吉へ出す手紙の宛名がフランス語で記されており、これによりようやく文吉の住所が判明した。すなわち、――

St Petersbourg (Russie)
B. Ytsicawa
18 Kirotchnaya
Chez M^le Comte Poutiatine.
（ロシア国　サンクト＝ペテルスブルク　キロシュナヤ十八番地　プチャーチン伯方ほどの意）

プチャーチン邸に引き取られた文吉は、日本にも来たことある『日本渡航記』の著者ゴンチャロフ、と外三人の教師からロシア語・歴史・数学などを教わったということである。(7) 文吉は在露中、こういった出張教師から個人指導を受けた以外に学校に入り、専修学科を学んだかどうかについては資料が手元に無いので何ともいえぬ。おそらく、文吉が学んだものは語学が中心であり、他は普通学に過ぎなかったようである。

明治二年（一八六九）、在露中の文吉は新政府より、一カ年六百ドル（メキシコドル）の学費が送金されることになったが、これは加藤弘蔵（弘之）らの政府への働き掛けが効を奏したものであろう。以後、送金はかれが帰国する明治六年（一八七三）まで続くのである。が、文吉は約八カ年にも及ぶロシア生活に終止符を打ち、妻子を残して帰国の途につき、同年九月十三日帰朝するのである。

帰国後の文吉は、帰朝の翌月―明治六年十月十七日に文部省七等出仕となり、新設の東京外国語学校魯語科の教師

となった。同年秋、かれは宇都宮三郎（元開成所教授手伝）の仲人により小林勘四郎の娘元子と結婚した。翌明治七年（一八七四）二月十日、外務省二等書記官を拝命し、特命全権公使榎本武揚に随行しペテルスブルクの日本公使館に赴任することになり、同年三月九日出帆し、六月十日に露都に到着した。同年九月六日と十月二十五日に橘耕斎（五十五歳）が兼恭宅を訪問している。耕斎は伊豆の戸田から日本を密出国して以来、十九年ぶりでこの年の九月に帰国したのであるが、ペテルスブルクの文吉から何か包みか手紙をことづかって来たものであろう。文吉と耕斎とのつき合いはその後も長く続いた。在露五年の後、文吉は榎本公使と共に帰国することになり、明治十一年（一八七八）七月二十六日ペテルブルクを発するとシベリアを横断し、ウラジオストックより小樽・箱館を経て同年十月二十一日東京に帰着した。十二年（一八七九）一月、文吉は外務省を依頼退職したが、二月外務省御用掛兼文部省御用掛（奏任待遇）となり、再び東京外国語学校魯語科教員となった。月給は五十円であった。十七年（一八八四）文部省御用掛、翌十八年外務省御用掛をも免ぜられ、さらに東京外国語学校も廃止となったので魯語教師も辞めた。十九年（一八八六）六月二十三日、黒田清隆がシベリア経由で欧米巡遊の途に上るとき、文吉は通訳として随行し、二十年四月二十一日帰国した。その後、文吉は二度と官途につかず、ごく少数の者以外との交際を除いて、世間との交渉を経つようになった。とくに父兼恭の没後（明治二十二年）、熱海・鎌倉・小田原に隠棲し、晩年は伊豆の伊東の「二橋別荘」で余生を送り、昭和二年（一九二七）七月三十日、八十一歳で逝った。文吉は通算すると十数年ロシアで生活しただけあって露語によく通じており、その語学力をもって日露外交の懸け橋となり榎本公使をよく補佐し、また草創期のわが国のロシア語教育の一翼をにない貢献するところが大であったに違いないが、わずか四十歳で隠遁生活に入ったために世間的にはそれほど顕著な功績を上げるまでには至らず、惜しみて余りある。もし外交官や魯語教師としての生活が、もっと長く続いていたら、きっとこの方面での業績に大いに見るべきものがあったはずである。

最後に、拙著『幕末おろしや留学生』および本誌掲載の論文（第三七巻第四号）ではあまりふれなかったが、文吉の性格についてもう少し言及しておきたい。父兼恭も無口であったようだが、文吉もそれに輪をかけて無口で非社交的であったという。家族のものともあまり話をせず、外国へ行くときも、当日まで何もいわず、トランク一つ持って隣町へでも出かけるように無造作に出かけた。物を書くことを好まず、書いたものは実に少ない。ペテルスブルクから送った父宛の消息文約十四通（現存しない）を除くと、ほとんど無いに等しいのである。[8] 文吉（未年生まれ）は嫌人癖があったようだ。けれどロシアで識り合った橘耕斎（幕末のロシア密航者）とだけは終生親しく交わり、病中にあるときはしばしば送金し、またかれが死んだときには香典を三十円（当時は一円がふつう）やれ、といって家人を驚かせたという。[9] またロシア革命のとき、日本へ逃れて来たロシア人の数は四百から千人ほどにもなり、かれらは神戸・横浜・東京・仙台などに散在していた。東京は最もその数が多かったようであるが、生活のために男は羅紗や石けんなどを売り、女は街角に立って花などを売って糊口の資を得ていた。こういった漂泊のロシア人の姿は当時の新聞にも紹介され、『朝日新聞』（大10・10・5夕刊）などは、パンフレット売りの親娘を「秋雨の辻に浪浪の娘を立たせて、呼売に出る露西亜少女の母マリヤが涙語り」といった見出しのもとに、写真入りで報道した。文吉は、「亡命露国婦人が銀座街頭で花を売っていた時などには、秘かに夜出かけて行って花を買い、若干の金を恵み与えたこともあった」[10]という。かれは常人とは少し違った所があったが、実は情義に厚く、人情味ある人であったようだ。

註

（1）原平三氏が戦前に発表した論文二十数篇は、すべて『幕末洋学史の研究』（新人物往来社、平成四年四月刊）に収められた。

（2）儒学における初学者課程の書。

（3）　「露国留学生派遣の顛末」（原平三『幕末洋学史の研究』所収）を参照。

（4）　註の（3）を参照。

（5）　ヴァリアク号については詳らかにしないが、備砲十四門の蒸気コルベット艦であり、艦長はLundhといった。一八六六年二月六日、二十四日の両日に横浜に入港していたことが『ザ・ジャパン・タイムズ・デイリー・アドバタイザー』紙によって知ることができる。以下、参考までに同紙の「船舶情報」に載った同艦の記事を掲げる。

SHIPPING　INTELLIGENCE.

VESSELS OF WAR IN PORT.					
NAME.	GUNS.	TONS.	HORSE POWER	DESCRIPTIONS	COMMANDER.
Russian Variag	14			Steam　corvette	Commander Lundh

The Japan Times'Daily Advertiser
A Commercial, Political and General Newspaper.
Vol.－NO.1113 Yokohama. Tuesday. February 6th 1866.

SHIPPING　INTELLIGENCE.

DEPARTURES.							
DATE.	VESSELS.	CAPTAINS.	FLAG&RIG.	TONS.	DESTINATIONS.	CARGOES.	DESPATCHED BY
Feb.19	Variag	Lundh	H.I.M.R.C^{V}				

Vol.1－NO.1113 Yokohama. Tuesday. February 24th 1866.

（6）　従来、一行の香港到着日については不確かであった。が、今回、「浮天斎日記」により、それが慶応元年八月二十八日（一八六五・一〇・一七）であったことがはっきりした。

（7）　鈴木要三郎談。註（2）に引用されている。

（8）　文吉がロシア語で書いた人名とその住所らしきメモが浅海福子（文吉の曾孫）さんが所蔵する書簡用紙（レター・ペイパー）の表紙に見られる。（写真参照）

（9）　文吉の末妹於千（明治三年十二月十一日生、のち海軍少将木村浩吉夫人）が戦前原平三氏に語った話。註（2）の論文に引用されている。

（10）　註の（8）に同じ。

次に史料として掲げるものは、「浮天斎日記」（全五巻）から書き抜いた文吉に関係する記述である。見落とし分も多多あるかとも思える。（　）内は筆者による註であり、また□は、文字が不鮮明であったり、判読に自信が持てなかった箇所である。

〔史料一〕

安政二年（一八五五）

正月小

八日　大風四十一度。秀太郎ト宇田川箕作(1)津川佐竹足立(2)ニ行ク。秀太郎足立ニ止宿。

二月大

十五日　四十六度。(3)六十九動。携(4)秀太郎行浅草。

六月大
朔日　六十七度。六十四動。携秀児行[5]永代橋。
八月大
十一日　六十八度。六十動。□秀児行浅草長吉。
十一月大
三日　四十六度。秀太郎幾右門行足立立請□。
十一日　三十五度。今井来。秀太郎行柏屋。
十二月小
十七日　三十四度。携秀太郎行浅草。
廿九日　三十二度。携秀太郎行街中求梅。

安政三年（一八五八）

正月小
六日　二十八度。秀太郎帰。
十七日　四十度。天台出勤[6]。秀太郎始小学。
廿六日　三十二度。十二円半金渡。秀太郎行足立。
廿七日　三十四度。御書物目録持出ス。天台出勤。秀太郎与於亀帰。

〔上記外記〕五月小　秀児行市川

八月大

晦日　携秀児仏参帰路使児訪杉田木村。

九月大

十日　秀児行足立。

十一月小

七日　携秀児行浅草。

安政四年（一八五七）

正月小

十日　三十二度。上野御成七時半御払。拍屋岩蔵来贈物鰹節。携秀児行浅草。

九月大

四日　六十度。秀太郎行嵐山。

十三日　五十四度。秀太郎行足立。七十度。

安政五年（一八五八）

正月小

廿二日　三十八度。出勤。行古賀。[7] 秀太郎行足立。

廿三日　三十九度。秀太郎帰宅告足立病。夜西尾来。

五月大

十二日　八十度。秀太郎行霊岸島。

六月小

十四日　八十二度。携秀児行麹町。

九月小

十九日　五十五度。行新道二番町松田善右ェ門内椿茂十郎託秀太郎読書。

十二月大

十七日　三十五度。出勤。秀児行足立。

安政六年（一八五九）

二月小

三日　四十度。出勤。秀太郎行谷中。

三月大

三日　雷　四十九度。提燈ヱ引出仕。行上野。秀太郎行足立。

十三日　六十二度。夜昌平内災[8]。秀太郎行谷中。

四月小

三日　五十四度。川本教授職[9]杉田玄端教授職西周助手伝。杉田来。榊原来。吉田婦来与秀太郎行谷中。

五月小

十一日　七十三度。行小野寺円元。秀太郎行赤坂。

六月大

七日　七十七度　出勤。御城出勤即刻行加藤[10]。木村行神奈川。秀太郎行赤坂。

七月小

十五日　七十八度。秀太郎行足立。

十月小

十日　五十九度。明日秀太郎行長敬寺[11]。

十二月大

三

廿十五日　三十五度。行島田附砲台図竝秀太郎。仏学一件書付。山岡送秀太郎願書写。

二

安政七年（万延元年）（一八六〇）

正月大

五

十一日　三十度。熨斗目出勤。掘来。秀太郎帰。(12)

五

二月小

九日　三十九度。出勤。椿行京都秀太郎送行蒲田。

四

閏三月大

○

廿一日　六十三度。与秀太郎行椿告休学。秀太郎森三郎行小林。

一

一

廿八日　六十二度。秀太郎行足立。

二

四月小

二
三日　七十度。小林来明日秀太郎仏学命下事。[13]
三

二
四日　七十三度。出勤。秀太郎出調所受命仏蘭西語稽古可□□。[14]
三

九日　六十六度。行赤坂不逢。秀太郎行小林。
一

六
十日　六十七度。出勤。秀太郎始行正泉寺学仏蘭西語。行長崎屋。
五

二
十一日　六十三度。秀太郎行正泉寺習洋字音以後毎日修業日曜日休日。
一

二
十八日　七十一度。風邪引。津山来。秀太郎稽古以後隔日。
四

三

二十日　七十五度。風邪引。秀太郎行小林止宿。
四

五月小

二
十一日　七十六度。出勤。秀太郎行小林。東作婦死去。
一

二
十二日　七十九度。秀太郎行東作。
三

七月小

四
五日　七十七度。出勤。求秀太郎刀。
六

八月小

三
五日　七十五度。出勤。秀太郎高輪止宿。
三

五

十一日　七十二度。秀太郎行小林祝転役。
七
九月大
五
九日　六十五度。秀太郎送亀女。高畠松木来。(15)
七
十月小
朔日　五十一度。急御用。小林□秀太郎□。
七
九日　五十五度。出勤。秀太郎稽古御賄□下始昨之命。
九
十一月大
三
十一日　三十二度。三国来。秀太郎行長敬寺。
二
廿五日　三十七度。出勤秀太郎改名市川文吉。泊蕃。
三
〔上欄外記〕　文吉

文久元年（一八六一）（万延二年）

二月大

四

八日　四十七度。秀太郎行小林。

六半

三月大

六

十一日　六十五度。出勤。秀太郎行芝見蒸気船風烈空帰。

八

十二日　六十三度。出勤。行古賀。秀太郎行村田巳三郎納宗門御改手形。

一

一

十七日　四十九度。行山岡願文吉元服。

六

四

十八日　五十度。出勤。文吉前髪為□度蕃。

九

廿日　風　四十四度。除文吉前髪。泊蕃。
三

五
廿八日　六十四度。文吉拝謁同道出仕。(16) 夜招朋友酒宴。
十

四月大

三
十八日　六十度。出勤。命文吉祝赤飯。
八

六月小

三
十六日　七十七度。行接遇所。
五

一
十七日　七十六度。出勤。秀太郎入門。
四

七月小

七

三日　八十二度。文吉捨女罹麻疹。
五五

九
十三日　七十八度。文吉行中村元□　□料。

九
十五日　八十度。文吉行布野。
九

九
十六日　八十二度。文吉行掘内。
八月大

三
十九日　六十八度。文吉行物産会。
十月大

四日　四十七度。文吉行念速寺。(17)
十月小

二
十日　四十度。出勤。文吉行吉田。加藤来。
デセ一日

五
十一日　四十度。林来。文吉行長敬寺。
デセ二日

八
十五日　五十一度。家内詣念速寺。文吉行附伺済地図。

文久三年（一八六三）

七月大

九
十六日　八十二度。文吉行掘内。

九月大
廿日　五十九度。四日宿状。十三日発福井今日届。文吉行高輪。

元治元年（一八六四）（文久四年）

十一月大

十五日　四十二度。出勤。文吉行足立。
廿四日　四十度。文吉教授手伝並当分助命下。
六二
十二月小　四十二度。出勤。佐野桂川来。文吉行永□三平。
廿五日
六〇

元治二年（慶応元年）（一八六五）

正月大
廿二日　四十一度。文吉行足立。
廿四日　風五十度。脉六十六動。文吉帰宅。
三月小
十七日　六五　六五〇　出勤。夜加藤□文吉魯行行之事。
十八日　六四　五九〇　文吉願魯行。夜調役達廿一日誓詞之事。
四月大

九日　六一　六七〇　出勤。文吉受魯行之命高林頭取廻勤。夜招隣家。緒方城次郎来。

十一日　五三　六一〇　与文吉行緒方。行箕作。

十二日　六三　五六〇　文吉逢新藤。(18)

十四日　六〇　六九〇　出勤。魯行人会合。林来。大築来。

十五日　五九　六六〇　出勤。支度百金請取文吉為之御城ニ行ク。教授方三十一人餞別会。

廿十六日　六五　六七〇　文吉集会始逢従僕富次郎。

廿十七日　六八　六三〇　緒方田中来。文吉行進藤(ママ)。全家像。文吉行高畠推乃洋紙。小林弥三郎来　出勤。願増百金。
村上来。行柳河写

廿八日　六四　七二〇　志賀山内作左ェ門今一人受魯行命。

五月小

朔日　六〇　七一〇　御証書下ル但箱館方預。(19)

廿五日　五七　七三〇　緒方来。

廿八日　六〇　七一〇　志賀来。

閏五月

三日　五九　七五〇　大築来。

十九日　五五　七二〇　出勤。接文吉支度金二度目百金。緒方田中来。加藤来晩食

廿四日　五七　七五〇　招魯行人酒宴。文吉行足立。三度目百金渡。

廿八日　五九　文吉森三郎行浅草。

書状上書ハ巻末ニ有

〔上欄外記〕文吉魯行発途

廿九日　五九　七〇〇　文吉魯行発途越谷泊安達美濃森三郎築地千住迄見送。

六月小

十一日　五八　七六〇　腸胃熱苦甚。出状文吉。緒方田中。

廿四日　五九　八〇〇　出勤。出状文吉託。□賀田。

七月大

九日　六三　八三〇　出勤有文吉箱館越年説。(20)

廿七日　六五　六七〇

〔上欄外記〕文吉魯舩乗込

廿八日　六四　七一〇

〔上欄外記〕同出帆長崎行

八月

五日　七五〇

六二

〔上欄外記〕夕七時文吉長崎着船

廿二日　六三　六六〇　出勤。掘送文吉書状。

〔上欄外記〕文吉長崎魯船乗組

廿三日　六四　六二〇　出勤。

〔上欄外記〕文吉長崎出帆

廿八日　六三　六二〇　出勤。

〔上欄外記〕文吉香港着

九月小

二日　六八　六四〇　出勤。箱館行文吉供富次郎帰府。

五日　六五　六二〇　森三郎句読師当分助。(21)

〔上欄外記〕文吉香港出帆

森三郎句読師当分助

十二月小
五日　六五　四一〇　出勤。廻伝習写真図於大築。
六日　五九　四一〇　大築来告伝習人八月廿三日長崎出帆廿八日香港着九月五日香港出帆。[22]

慶応二年（一八六六）

正月大
七日　六四　五四〇　行津田杉高畠。佐野山内来。津田来附大野弥三郎[23]レイデン十月十五日状。戌六月十八日江戸出帆亥四月十八日和蘭着船レイデン在留子八月移居アムステルダム丑九月移居ハーゲ。[24]
九日　五八　六〇〇　行大野弥三郎常盤橋。

〔上欄外記〕□生
未　五月十一日　文吉
子　八月二十日　森三郎
〔上欄外記〕魯ノ四月一日魯行人着魯都
十一月廿四日　喜□

十二月五日　ヘレナ島着[25]
八日　出帆
正月廿七日　英ポルト□[26]
二月九日　出帆
二月九日　夕佛セルボルグ着[27]
十一日　夕出車
二月十二日　朝巴里着
十三日　朝出車
二月十四日　朝ベルリン着
一時休
二月十五日　朝魯□ニ入ル
微雪
二月
十六日　午後一時魯都着
コスケイチ宅[28]ニ留ル
二月廿日　借家ニ移ル
橘耕斎即大和来
外ハ寒一二度

内ハ暖十五六度
三月三日　即魯四月五日
午後魯行□　□　被覩□
右三月十三日認
以前十一(?)月廿九日出□
七月大
廿七日　六二　六五〇　出勤。二月廿八日魯文吉状自掘届。
廿八日　六二　六五〇　出勤。出文吉状寅四番。

廿七日の記述の上欄外記に、フランス語でM. Ytsikawa Bunkitsi est Japonais à Petersburg（ママ）（市川文吉はペテルスブルクに滞在する日本人の意）と書かれている。ちなみに兼恭は蘭語、ドイツ語に加えて多少フランス語の知識をも有していたようである。「浮天斎日記」の元治元年十二月二日付の記述に「佛学会読始」とあり、おそらくこの日から仏語の訳読の勉強を始めたものであろう。また同日記（「巻之三」―自安政二年（一八五五）至文久三年（一八六三））の扉うらに毛筆で簡単な挨拶の文がカタカナで記され、その下に訳語が付いている。

ボンショウル　モシエル　御早っ

メル　シイ　□有下
ア　ジュウ　モシエル　□宅之詞

三月大
晦日　五五　六一〇　行津田高畠。正月廿一日出魯行人
ヘノ書島屋持来。
四月小
[上欄外記] 魯便之□
十一日　五四　六六〇　出勤。長尾来。田中敬輔告与三田喜六約魯便事。
五月小
廿三日　五九　六九〇　中橋花女来。在魯山内作左ェ門状届。三月十五日付。
廿四日　六〇　六八〇　億川(29)来。安達来。森三郎行探魯信。
[上欄外記] 文吉状届
六、六日□

寅四番魯状出

七月大

廿七日　六二　六五〇　出勤。二月廿八日魯文吉状自掘届。

廿八日　六二　六五〇　出勤。出文吉状寅四番。

八月

晦日　六四　六三〇　出勤。六月□日出文吉状届。

［上欄外記］文吉状届。

九月小

七日　六四　六四〇　森三郎英吉利江留学生之命下ル。

廿九日　五二〇　林洞海来附文吉像。(30)

［上欄外記］寅三番魯状出

十月

廿日　風雪　五〇〇　終日風夜初雪。森三郎発足宿神奈川。横浜大火。

十一月大

四日　四五〇　松本良順携文吉像来。

慶応三年（一八六七）

正月

七日

八日

十五日　六二一　三七〇　出勤。加藤来託之文吉二号信送予之像。

四月大

［上欄外記］十月廿日　魯着

発文吉三号信

十五日　五六　六二〇　出勤。十月廿日魯着百七十六日目出三号信文吉。

［上欄外記］三月十八日英着発文吉森三郎一号信

田中パリス着　ルーブル宿(31)

田中移居スリイ町第三□(32)

十月廿日　魯着　始普請　発文吉三号信
十月廿日　魯着百五十二日目　発文吉四号信

五月
四月大
九日
五九　七〇〇　緒方送文吉届物託之文吉四号森三郎三号信。

十二日
五九　七〇〇　出関作州御廻出文吉写真及書付。

十五日
五九　七一〇　出開会合接森三郎三、四、五号信及写真。発文吉四号信。

十七日
五八　七五〇　出開。山内作左ェ門不逢。

六月小
朔日
五九　七三〇　発森三郎三号信文吉五号信。

［上欄外記］十一月七日着
発森三郎三号
文吉五号

七月小

五日　五八　七九〇　出成四月十四日出文吉二号信届。

[上欄外記]　文吉二号信届。

八日　五九　七六〇　出成。発文吉六五号信森三郎四号信

[上欄外記]　発文吉六、五号信

発森三郎四号信

八月大

廿八日　六一　六八〇　出成。行加藤夜食。行柳河(33)森三郎六号信文吉七号信。

[上欄外記]　発文吉七号

森三郎六号

九月小

七日　六二　六八〇　出成。山内作左ェ門来。

十二日　六五　六二〇　出成。文吉五月十五日出三号信森三郎

七月十一日出十三号信届送民部公写真。(34)

十一月大

七日　五八　五一〇　休日。七月廿四日入黒沢退塾。発文吉九号信森三郎八号信。

〔上欄外記〕発文吉九号

森三郎八号

十二月大

六日　六六　雪四四〇　文吉九月十四日三号信森三郎

九月廿九日十八号信届。

〔上欄外記〕文吉三号

森三郎十八号届

十日　六三　三八〇　出□。手□調所。発文吉十号

森三郎九号信送略暦。

〔上欄外記〕発文吉十号

森三郎九号

明治元年（一八六八）

正月小

五日　六四　四〇〇　発文吉森三郎一号信。

[上欄外記]　発文吉森三郎一号信

十六日　三三〇〇　行開成所。於美濃来。発文吉森三郎二号信託森三郎絹糸。

[上欄外記]　発文吉

森三郎二号信

二月大

七日　四五〇　行加藤。発文吉森三郎三号信。

五月大

五日　七三〇　森三月十八日後六号五号文吉三月十日出二号信届。写真三枚。

[上欄外記]　文吉二号

森五号六号　届

六月小

［上欄外記］森三郎九号

文吉三号　届

十五日　三八　七七〇　森三郎壬四月五日出九号文吉四月廿八日

写真（緒方、田中）二枚入三号届。

［上欄外記］文吉状届

六月

廿六日　緒方城四郎　大築

小沢清次郎　田中次郎

九月

七日　六六　五二〇　大築保太郎来告魯行学生四人

五月廿七日出発

八月廿七日横着　文吉一人在留

九月二日□宅

併一ヵ月逗留

明治二年（一八六九）

三月

廿三日　午後行正法寺空皈行舎密[34]□ガラタマ託書[35]。

［上欄外記］ガラタマへ託し文吉へ出状

四月七日　市川状届

八月小

日記の同月のページに小さな紙切れが二枚張ってあり、それには次のような文面が見られる。

稽古書付

丑ノ閏五月晦ニアリ

市川文吉

其方儀魯西亜学校ニ御而専ヲ勉

精勤学□[36]相聞□ニ付壹ヶ年ニ付メキシカ

ントル六百枚為学費被下之事

明治己巳[ママ]午八月　外務省

文吉御手当加藤弘之ゟ七月廿九日発

文吉一件□プーチャー氏[37]□御世話

ニ付再び建白致し処遂ニ一ヵ年六百ドル公用

人より□。

明治三年（一八七〇）

八月

朔日　八一〇　緒方来。

二日　八二〇　緒方来。

四日　七八〇　緒方来。

十二日　七五〇　田中来。

十月

廿二日　火　五六〇　出勤在魯文吉四月四日出書翰届

［上欄外記］文吉状届　写真三枚入。

明治四年（一八七一）

三月小

九日　金　五九〇　出勤。文吉閏十月十日出贈物届。

［上欄外記］文吉贈物届アリ

十九日　六〇〇　457
48　不快引。託ハルトリイ出状魯西亜在留文吉。
[上欄外記] 出状文吉

明治五年（一八七二）

三月小

廿日　市川十一日出状届。

五月

六日　昨日之日付出状文吉託奥山。

八月

十五日　火　七一　十一日出十二□信紙届。出状文吉。
[上欄外記] 出状文吉
十三号信届
[上欄外記] St-Petersbourg (Russie)
B. Ytsicawa
18 Kirotchnaya
Chez M^r^ le Comte Poutiatine

明治六年（一八七三）

四月

廿一日　月　託奥山文吉書状

［上欄外記］出状文吉十三号信届

九月

十三日　火　七二[38]　3010　出。文吉帰朝朝九時横浜着三時半帰宅。宇都宮来。

［上欄外記］文吉帰朝

十月

十七日　金　六二　3030　不参。文吉文部省七等出仕拝命。

十八日　土　六七　3015　出。[39]文吉外国語学長。（ママ）

［上欄外記］文吉七等出仕　出状市川

三十一日　金　六一　985　出。於元縁談調。

十一月

二日　日　五四　3000　大久保来。文吉於元縁組届済。[40]巳年旧九月廿日即新十一月六日於元十六年三月。

三日　月　五二　785　不参。夜媒人宇都宮夫婦来文吉於元婚礼整。
[上欄外記]　天長節
文吉婚礼済
十三日　金　五四　007　出。文吉行宇都宮訪婦病。

明治七年（一八七四）

文吉　二十六年八ヶ月
盛三郎　二十一年四ヶ月

二月
十日　火　四〇　990　不参。文吉外務二等書記官魯国在勤拝命。
廿五日　水　四四　983　不参。文吉御手当渡。
[上欄外記]文吉二等書記官魯国在勤。

三月
七日　土　四三　015　文吉御暇乞頂戴物。
九日　月　五四　004　文吉魯行乗船陸前水沢縣一ノ関
元長第二橋謙随行十八歳

［上欄外記］文吉魯行於寅誕。

五月

三日　日　六九　016　四月三日　ゴール出文吉状。(41)

［上欄外記］文吉状届

六月

九日

十日

［上欄外記］文吉魯着

十八日　木　七二　990　文吉四月十八日アレキサンドリイ出状届。

廿三日

［上欄外記］文吉誕生(朱)

八月　三十日　七五　975　魯国状届六月十日着魯。

［上欄外記］魯国状届

九月

六日　日　七四　019　橘耕斎来附文吉贈物。

十月

廿五日　日　六二　007　ヤマトフ来。(42)桜井得太郎来。

明治八年（一八七五）　（文吉に関する記述は無い――引用者）

明治九年（一八七六）

三月

十三日　土　五二　004　一月十五日魯信届。

四月

三十日　金　五五　999　文吉給渡。

十月

廿一日　五八　989　文吉給渡。

明治十年（一八七七）

六月

廿六日　火　七八　978　魯国荷物届。三輪甫一来告魯。

国荷物届之□但肖像額猟銃等。

明治十一年（一八七八）

十月

廿一日　日　五九　017　与吉村及婦行横浜末吉町二丁目出浦鎌作与岩□休本町松木屋四丁目忠助□昨与文吉乗気車。

［上欄外記］文吉帰朝

廿八日　月　六〇　002　出状　市川及宮原贈□祝□。

十一月

廿四日　日　四九　078　与文吉行茶園。(43)

十二月

二日北風　月　四九　962　榎本来。

明治十二年（一八七九）

一月

廿日　雪三寸　月　三十　019　文吉出外務二等書記官辞表。

廿七日　月　38　027　加藤老婦葬送於富文吉見送。

[上欄外記] 文吉出辞表大寒

二月

四日　火　四一　007　文吉依頼免職更御雇□奏仕給五十円。

六日　木　三九　035　文吉兼任魯語学教員月給五十円。

[上欄外記] 文吉魯語学教員兼任

九日　日　三六　911　夜文吉行平岡。

十日　月　三六　012　出文吉拝命届書。

三月

七日　金　四五　988　接文吉備金。

九日　日　四〇　012　文吉与宇都宮行茶園。

廿一　月　五六　996　与文吉行向島釣堀。

五月

廿九日　木　六二　999　附文吉五十円。

六月

十一日　水　六五　997　榎本来。

七月

二十日(ママ)　水七八　002　文吉行画島。

廿七日　水　七八　002　文吉行玉川。

十月
十二日　日　五八　025　文吉行池田贈謝物。

明治十三年（一八八〇）

三月
十六日　火　四八〇　文吉増給十円。

四月
十七日　月　五九〇　出文吉家督相続届書。
十八日　火　六〇〇　文吉家督相続届済。

六月
廿三日　水　六七〇　行上野菜園。

［上欄外記］文吉（未）

七月
十八　日　七四　文吉行日光。

八月
四日　水　七九〇　文吉夫婦行越後。

十一月

四日　火　五三　993　文吉附五十円。
二十日　木　五〇　999　譲経□於文吉。
十二月
廿四日　金　三五〇　文吉行熱海。

明治十四年（一八八一）

六月
六日　月　七三〇　宇都宮来。文吉魯国海軍中将レッソス
フキー氏接待役横浜の出状奥山。
七月
十日　日　七七〇　文吉行綱船。
八月
十五日　月　八一〇　行深川八幡及州崎。増田甲斎来。(44) 盛三郎来。

明治十五年（一八八二）（文吉に関する記述は無い――引用者）

明治十六年（一八八三）

二月

十九日　月　四〇〇　文吉告於寅与鹿児島士族箱館伜（ママ二十八年）御用掛

二木彦七結婚□。

明治十七年（一八八四）（文吉に関する記述はなく、兼恭は「明治十七年ヨリ日記ヲ止む」と記している。が、さらに次のような記述が見られる。）

（明治）

十八年七月　三八〇　木　文吉支那行。三十日長崎着。八月二日

長崎発仁川行。九月二日上海出帆。同十四日長崎出帆。同十八日帰朝。

［史料二］

江戸在勤のフランス公使館員ポール・ド・テュランヌ・ディナック伯（Comte Paul de Turenne d'Aynac）は、箱館に出張した折に得たロシア情報の中で、ロシアが外交通商の拠点を作ろうとしている動静を報じ、さらに数々の施策を述べている。同書簡には語法上おかしな所、単語の不明箇所も少なからず見られるが、そのままにしておいた。ロシア留学関連では、蝦夷の名士の中から選ばれた若者が数名ロシアに派遣され、かの地で教育を受けさせることになった旨、レオン・ロッシュ駐日仏公使に伝えている。すなわち幕府のロシア留学生派遣計画のことである。次に引くものがその報告書（マイクロフィルム）だが、末尾数行（下線を引いた箇所）が該当部分である。（……）内は判読

不能の箇所。

Yokohama, 13-Juin-1865

Monsieur le Ministre.

J' ai pu, lors de mon śejour à Hakodadi,
recueillir de plusieurs sources officielles
des informations qui font ressortir dans
leur ensemble les combinaisons imaginées
par les diplomates(……)en vue d'éténdre
leur possessions japonaises(……)
Nous avions lieu de le craindre, l' occupa-
tion de l'île Sagalie tout entière par les troupes
Moscovites est aujourd' hui un fait accompli.
Deux forts élvés dans la partie méridionale
de cette île sont la pour affirmer l' expansion
qu' a prise dans ces derniers l' autorité
du Tsar.(……) conséquence immédiate de ce
nouvel incident il règne une certaine in-

quiètude des habitants de Yesó, que le seul
détroit de Lapayrouse séparé de Sagalie.
Les établissements que les Russes ont fondés
à Hakodadi et le grand nombre de
navires de leur natation que naviguent
dans ces paysages ne sont pas(……), il
faut l'avouer pour les assurer. Si l'on
ajoute qu'aucune des possessions Russes
de l'Extrême Orient s'offre les mêmes
garanties de salubrité que Yesó, en
concluera aisément que ces inquiétudes
leur sont suggérées par une série de faits
qui pour être peu apparents, n'en témoignant
pas moins que l'idée de conquête va diriger
encore la politique du Cabinet de St. Péters
bourg.
C'est sans aucune doute dans le but
de faciliter l'occupation de cette île, que

ses diplomates ont proposé de faire ouvrir
sur la côte Nord de Nippon, un port en
échange de celui d' Hakodadi, dont la commerce
prétendent-ils sera toujours de (……) peu
d' importance.
En attendant qu' ils s' occupent dévoiler
leur projets, ils s' occupent d' en faciliter
l' exécution par la création de Mission à
Hakodadi, la fondation d' une hôpital où sont
seuls reçus gratuitements les Japonais et
dont le personel relevé directment du Mini-
stère des affaires étrangères de St. Péters-
bourg et par l' envoi en Russie d' un
certain nombre de jeunes gens choisies
parmi les familles les plus distinguées
d' île pour y achever leur éducation.
……

Veuillez agréer Monsieur le
Ministre l' hommage du profond respect
avec lequel
J' ai l' honneur d' être
Votre très humble et obéissant serviteur
Comte de Turenne.

註

（1）天文台和解御用出役宇田川興斎のことか。
（2）薩摩藩医足立梅栄宅のことか。
（3）カ氏（温度）。
（4）「脈動」の意。
（5）秀太郎のこと。
（6）天文方。
（7）開成所頭取古賀勤一郎。
（8）昌平坂学問所（維新後、昌平校、大学校）。
（9）川本常民のこと。
（10）加藤弘蔵（弘行）。
（11）長敬寺（ちょうきょう）（真宗大谷派）は浅草区松清町に位置。
（12）開成所教授職堀達之助。
（13）開成所出仕の小林祐三か小林鼎助のことか。両人は仏蘭西学専攻。

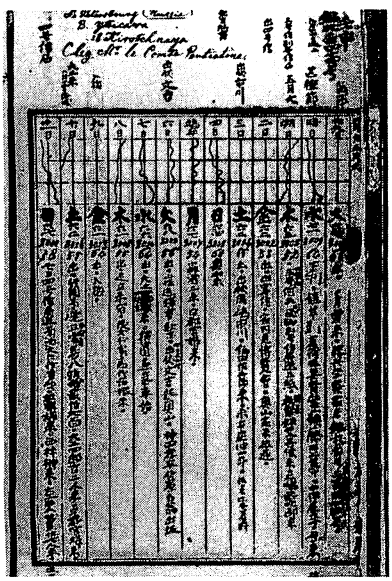
(14) 蕃書調所。
(15) 高畠五郎。
(16) 福井藩邸において藩公に拝賜したこと。
(17) 念速寺（真宗大谷派）は文京区白山に位置。
(18) 新藤鉛蔵。
(19) 渡航許可の証書（パスポート）。
(20) 当初、留学生の一行はゴシケヴィッチらと共に渡露する手はずであった。けれど同人は一行を待ち切れず箱館より一足先に帰国の途についたため、シベリア経由で露都に赴く案が出された。が、彼の地は折から寒さに向うので、いったんは来春まで待つことに決した。しかし、露艦二隻が折よく入港したので、これに搭乗を頼み、出帆に至った。
(21) 森三郎は英学専攻。
(22) 大築保太郎。
(23) 杉亨二。
(24) 文久二年のオランダ留学生。渡蘭後、精密器機製作を学ぶ。
(25) セント・ヘレナ島。
(26) プリマス港。
(27) シェルブール港。
(28) ゴスケヴィッチ。
(29) イギリス留学生億川一郎。
(30) 文吉の肖像写真（ポートレイト）。
(31) パリの「グラントテル・デュ・ルーブル」のこと。
(32) ペテルスブルクにおける田中の下宿のことか。
(33) 柳河春三。

(34) 徳川昭武。
(35) 松法寺は駿河江尻宝基院の末寺で浅草松葉町に位置。
(36) オランダ人 Koenroad Wouter Garatama (1831〜89)。開成所内の分析窮理所で物理と化学を教えた。
(37) 六百メキシコドル。
(38) プチャーチン伯。
(39) 宇都宮三郎。
(40) 「出勤」の意か。
(41) 元は安政四年十一月六日に生まれ、大正十五年五月二十四日没した(雑司ヶ谷墓地の市川家の墓碑による)。
(42) ポイント・デ・ゴール港(セイロン島)。
(43) 橘耕斎のロシア名。
(44) 市川家の茶畑は雑司ヶ谷に在ったものか。「茶園ですか、さあ、場所をはっきり覚えておりませんが、雑司ヶ谷でかなり広く、私(兼恭の末子於千)もよく茶つみに行きました。六合社・宇都宮さんの事はよくききました」(原平三「市川兼恭」『幕末洋学史の研究』所収)。
(45) 橘耕斎は帰国後、増田甲斎と称した。

(追記)
本稿を草する上で東京大学史料編纂所、日本学士院、函館市史編纂室の清水恵及び文吉の曾孫浅海福子、加太宏邦教授ら三氏のお世話になりました。記して謝意を表します。

Ⓐ市川兼恭の「浮天斉日記」(巻之三)表紙
(東京大学史料編纂所蔵)

Ⓑ晩年の市川兼恭の肖像
(日本学士院蔵)



Ⓒ市川兼恭の「浮天斉日記」
(東京大学史料編纂所蔵)

Ⓓ市川文吉がレターペーパーの表に
書いたロシア文字(浅海福子氏蔵)